

### Ⅲ 分科会報告

## 新課程対応大学入学共通テストを終えて

### —「公共」をどう授業するか—

森 一将（学校法人平山学園 清林館中学校・高等学校 公民科教科長）

#### 1. はじめに

2025年度（令和7年度）、学習指導要領の改訂に伴い、大学入学共通テストにおいて新科目「公共」が導入された。これまでの「現代社会」が担ってきた役割を継承しつつ、より主権者教育としての側面を強めた本科目の導入は、現場の教員に「知識の伝達」から「思考力の育成」へのパラダイムシフトを迫るものであった。本報告では、明治大学教育会第18回総会・研究大会第1分科会での発表に基づき、初年度の共通テスト分析から得られた知見と、それに対する実践的な授業アプローチとしての「A.L. Time (Active Learning Time)」の有効性について、具体的な事例を交えながら考察する。

#### 2. 2025年度大学入学共通テスト「公共、政治・経済」の分析

##### 2.1 受験状況と全体概況

本年度の「公共、政治・経済」の受験者数は127,120名に達し、地理歴史・公民の選択科目の中で最大規模となった。平均点は62.66点（中間集計値）であり、旧課程「政治・経済」の昨年度平均点（44.35点）と比較して大幅に上昇した。この要因としては、新課程への移行に伴う経過措置や、資料読解を中心とした設問構成が受験生にとってアプローチしやすかったことが挙げられる。

##### 2.2 出題形式と内容の特徴

大問構成は、第1問・第2問が「公共」（配点25点）、第3問以降が「政治・経済」との共通問題という形式であった。特筆すべきは、単純な知識の再生を問う設問が激減し、初見の資料（文献、統計、対話文）を読み解き、論理的に思考させる設問

問2 下線部①に関連して、生徒Aと生徒Bは、仕事にかかわる性別役割意識について調べるなかで、内閣府の資料を見つけた。次の表1は、生徒たちが、その資料の中の二つの調査項目について、「そう思う」を選んだ回答者数と「どちらかといえばそう思う」を選んだ回答者数との合計の割合を、肯定的な回答割合としてまとめたものである。表1から読み取れることとして適当でないものを、後の①～④のうちから一つ選べ。  2

表1 (%)

「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ」への肯定的な回答割合				「同程度の実力なら、まず男性から昇進させたり管理職に登用するものだ」への肯定的な回答割合			
男性 20代	26.2	女性 20代	14.5	男性 20代	20.4	女性 20代	11.0
男性 30代	25.6	女性 30代	17.7	男性 30代	20.7	女性 30代	10.4
男性 40代	27.2	女性 40代	23.3	男性 40代	17.6	女性 40代	10.4
男性 50代	32.2	女性 50代	24.7	男性 50代	15.7	女性 50代	8.4
男性 60代	31.2	女性 60代	28.0	男性 60代	15.8	女性 60代	9.4

(注1) 対象は全国の男女20代～60代である。  
(注2) 各年代区分の割合は、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」を選んだ回答者数の合計を基に再計算を行い、小数第2位を四捨五入した値である。  
(出所) 内閣府「令和4年度 性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する調査研究 調査結果」(内閣府 Web ページ)により作成。

- ① 「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ」への肯定的な回答割合は、女性20代～女性60代では、年代が上がるほど高くなっている。
- ② 「共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ」への肯定的な回答割合は、男性20代の方が女性20代よりも10.0ポイント以上高い。
- ③ 「同程度の実力なら、まず男性から昇進させたり管理職に登用するものだ」への肯定的な回答割合は、男性20代と男性30代のみ20.0%を超えている。
- ④ 「同程度の実力なら、まず男性から昇進させたり管理職に登用するものだ」への肯定的な回答割合は、60代において男女の差が最も大きい。

[資料1: 共通テストの設問構成と傾向分析(資料スライド15～17ページ参照)]

が主流となった点である。例えば、男女共同参画社会に関する設問や、ICTの活用、ウクライナ情勢、格差問題など、現代社会が直面する諸課題が、架空の探究学習の場面設定とともに多角的に出題された。

### 3. 新課程「公共」をめぐる「誤解」と現場の課題

#### 3.1 「公共」は知識だけで対応可能か

一部の受験指導の場では「公共は現代社会の焼き直しであり、常識や最低限の知識で解ける」という楽観論が見られた。しかし、本試験の結果を詳細に分析すると、その認識は危ういと言わざるを得ない。

確かに資料読解能力があれば正答可能な問題も存在するが、それは「知識が不要」であることを意味しない。むしろ、膨大な資料から正解を導き出すための「軸」となる概念理解が欠落していれば、時間内に解答を終えることは困難である。

#### 3.2 思想・倫理分野の重要性

第2問において、ハンナ・アーレントの「活動」や、ハーバーマスの「対話的理性」といった思想的背景を問う空欄補充問題が出題されたことは象徴的である。新科目「公共」は、単なる時事解説ではなく、人間が公共空間においていかに在るべきかという哲学的な問いを内包している。また、「形式的平等」と「実質的平等」の差異を問う設問など、教科書レベルを超えて用語の本質的な意味を問う姿勢が明確に打ち出されている。

**第2問** 「公共」の授業のまとめとして、生徒Aの班は、「現実社会の諸課題の解決に向けて、人と人が対話や議論をする公共空間を持続的に形成するには、どのようなことを考えるべきか」という課題を設定し、探究活動を行った。次の問い(問1～4)に答えよ。(配点 13)

問1 生徒Aの班は「公共」の授業で、公共空間の形成に関して、次の先生の説明を受けた。先生の説明中の空欄「ア」～「ウ」に入るものの組合せとして最も適当なものを、後の①～⑧のうちから一つ選べ。 5

**先生の説明**

「公共空間」とは、「人間同士のつながりや関わりによって形成される空間」を意味する。そこでは、人々が主体的に参加し、互いの意見を尊重しながらこの空間を形成していくことが期待されている。

【コミュニケーションの行為の理論】という著書のある「ア」によれば、公共空間では対等な立場で自由に意見を交わすという共通理解のもとで、合意を形成していくことが大切であり、そのような合意形成には「イ」が必要である。

また別の哲学者は著書【人間の条件】で、人間の営みを「生命を維持するために必要な営み」である「労働」、「道具や作品などを作る営み」である「仕事」、「人と人が「ウ」営み」である「活動」の三種類に分け、三番目の「活動」こそが公共空間を形成する、と論じている。

① ア	アーレント	イ	対話的理性	ウ	言葉を通して関わり合う
② ア	アーレント	イ	対話的理性	ウ	契約を結んでこれを守る
③ ア	アーレント	イ	他者危害原理	ウ	言葉を通して関わり合う
④ ア	アーレント	イ	他者危害原理	ウ	契約を結んでこれを守る
⑤ ア	ハーバーマス	イ	対話的理性	ウ	言葉を通して関わり合う
⑥ ア	ハーバーマス	イ	対話的理性	ウ	契約を結んでこれを守る
⑦ ア	ハーバーマス	イ	他者危害原理	ウ	言葉を通して関わり合う
⑧ ア	ハーバーマス	イ	他者危害原理	ウ	契約を結んでこれを守る

[資料2:「公共」の誤った認識と実態の乖離(資料スライド18ページ参照)]

## 4. 授業実践の提案:コペルニクスの転換

### 4.1 「A.L. Time」のコンセプト

共通テストの変容に対応するため、報告者は「コペルニクスの転換」と称した授業改革を提唱している。これは、教員がマイクを持って知識を流し込む「一方通行型授業」を全否定するのではなく、生徒自身が「公共」という科目を主体的に思考するための時間を確保する手法である。この「A.L. Time (Active Learning Time)」では、以下の3つの柱を重視する。

1. 「倫理分野」の強化：社会契約説や現代思想を通じ、論理的思考のOSを構築する。
2. 「データ・日本語分析」の徹底：統計資料や長文読解を通じ、情報の取捨選択能力を磨く。
3. 共通テスト攻略への特化：単なる過去問演習ではなく、設問の「構造」を理解させる。

#### 4.2 具体的な実践事例: 心理的葛藤の類型化

生徒にとって抽象的になりがちな心理学的な概念(葛藤)を、共通テスト形式の設問を用いて実践的に学習させる。例えば、「友人との楽しい時間(接近)」と「勉強不足による不安(回避)」が混在する「接近一回避型」の葛藤など、具体的な学校生活の場面をモデル化し、選択肢の中から論理的に正しい組み合わせを選ばせる訓練を行う。

**第1問** 映画好きの高校生カシマさんとフルヤさんは、一緒に映画館で観た映画の感想などを帰り道で話し合った。次の場面1の会話文および後の場面2のインタビュー記事を読み、後の問い(問1～5)に答えよ。(配点 15)

##### 場面1

- カシマ：とても面白かったね。登場人物の④葛藤がよく分かって、共感できたよ。  
フルヤ：そうだね。映画の序盤は淡々としていたけど主人公の高校生目線をリアルに感じたし、中盤の「人生たった1回だよ」という直球過ぎる台詞が心に響いたよ。  
カシマ：ほかに、高校卒業前の進路決定が人生を左右するほど重要だという台詞もあったね。私はまだなりたい職業が決まっていないから、学びの選択肢が多そうな大学に入学したいな。オープンキャンパスに行ってみなきゃ。  
フルヤ：いいね。①職業選択は自由にできるのだから、じっくり考えていけばよいと思うよ。私は、今日観た映画にとっても興味を引かれたから、映画監督のこととかエンターテインメント関係の職業とかについて調べてみようかな。

問1 下線部④に関連して、「接近一回避型」の葛藤の例として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 休日の過ごし方を考えるとき、友人と遊びに出かけたい一方で、家でゆっくりしたいとも思う。
- ② 友人と過ごす時間がとても楽しいから毎日でも学校に行きたいが、つまらない授業は受けたくない。
- ③ 貯蓄の使い道を考えるとき、好きなアーティストの音楽アルバムを購入したいが、ライブ限定グッズも欲しい。
- ④ せっかく自由になれる休日だから家の手伝いをしたくないが、だからと言って親に叱られたくもない。

[資料3: 葛藤の類型に関する演習問題 (資料スライド22 ページ参照)]

## 5. 実践演習とデータリテラシー

### 5.1 二酸化炭素排出量の推移を題材に

資料読解能力の育成において、報告者が実際に行った演習を紹介する。2026年度代ゼミ共通テスト実践演習を参考に、2005年から2015年にかけての主要国の二酸化炭素排出量の推移を分析させる課題である。ここでは、単にグラフの増減を眺めるだけでなく、「2005年比で何%減少したか」といった具体的な計算や、複数の資料（表と図）の整合性を検証させる。

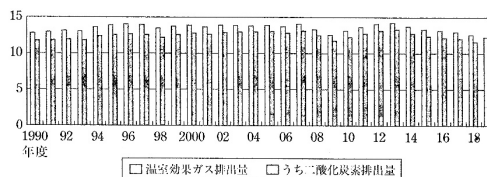
### 5.2 論理的検証のプロセス

例えば、ある選択肢が「2015年の合計値は2005年の合計値よりも小さい」と述べている場合、生徒に実際に数値を合算させ、その正誤を数学的に裏付けさせる。このような「手間のかかる検証」を日常の授業に取り入れることで、共通テスト特有の「一見正しそうに見える誤文」を見抜く力を養うことができる。

**第2問** 生徒Xのクラスでは、地球温暖化問題と持続可能性について課題探究を進めている。これに関する次の問い(問1～4)に答えよ。(配点 12)

問1 生徒Xは、日本の温室効果ガスの排出状況について調べた。資料1は1990年度から2019年度までの日本の温室効果ガス排出量の推移を示したものである。また、資料2は1990年度から2019年度までの二酸化炭素排出量(発電及び熱発生などのための化石燃料の使用に由来するエネルギー起源)について、工場などの「産業部門」、自動車などの「運輸部門」、商業・サービス・事業所などの「業務その他部門」、「家庭部門」の4部門を示したものである。資料1から読み取れる内容a～cと、資料2から読み取れる内容d～fのうち、正しい記述を選んだものの組合せとして最も適当なものを、後の①～⑨のうちから一つ選べ。 5

資料1 1990年度から2019年度までの日本の温室効果ガス排出量



(注) 単位は百万トンCO<sub>2</sub>換算

資料2 部門別エネルギー起源二酸化炭素排出量

年度	産業	運輸	業務その他	家庭
1990	503	208	131	129
1995	489	249	162	150
2000	477	259	190	156
2005	467	244	220	171
2010	430	229	200	178
2015	429	217	219	187
2019	384	206	193	159

(注) 単位は百万トンCO<sub>2</sub>である。また、数値は小数点以下四捨五入している。  
(出所) 資料1、資料2とも環境省「令和3年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」(環境省Webページ)により作成。

資料1から読み取れる内容

- a 1990年度から2019年度までの間で、日本の温室効果ガス排出量が最大となった年度は2014年度である。
- b 2018年度と2019年度の日本の温室効果ガス排出量は、2005年度の日本の温室効果ガス排出量と比べて減少している。
- c 1990年度の日本の温室効果ガス排出量のうち二酸化炭素排出量は、2012年度の日本の温室効果ガス排出量のうち二酸化炭素排出量よりも多い。

資料2から読み取れる内容

- d 産業・運輸・業務その他・家庭の各部門とも、2019年度における二酸化炭素排出量は、いずれも1990年度の二酸化炭素排出量と比べて減少している。
- e 2019年度の産業部門の二酸化炭素排出量は、1990年度の産業部門の二酸化炭素排出量と比較して、3割以上減少している。
- f 2015年度の産業・運輸・業務その他・家庭の各部門の二酸化炭素排出量を足し合わせた値は、2005年度の産業・運輸・業務その他・家庭の各部門の二酸化炭素排出量を足し合わせた値よりも小さい。

- ① aとd    ② aとe    ③ aとf
- ④ bとd    ⑤ bとe    ⑥ bとf
- ⑦ cとd    ⑧ cとe    ⑨ cとf

[資料4:CO<sub>2</sub>排出量に関するデータ分析演習  
(資料スライド20～21ページ参照)]

## 6. おわりに —公民教育の未来に向けて—

「公共」という科目の本質は、単なる知識の習得にあるのではなく、正解のない問いに対して、他者と対話しながら合意形成を図るプロセスを学ぶことにある。大学入学共通テストが資料読解や論理的思考を重視する方向に舵を切ったことは、この科目本来の趣旨に沿ったものと言える。我々教員に求められているのは、教科書の内容を網羅することに汲々とするのではなく、生徒が社会的事象に対して「なぜそうなるのか」「自分ならどう考えるか」という問いを持ち続けられるような場を設計することである。本報告で述べた「A.L. Time」の実践が、その一助となれば幸いである。

今後も、明治大学教育会での学びを活かし、変化し続ける入試制度と社会情勢に対応した公民科教育の在り方を模索していきたい。

---

### 参考文献・資料

- 2025年度大学入学共通テスト「公共、政治・経済」本試験問題
- 明治大学教育会第18回総会・研究大会 第1分科会発表資料（森一将 著）
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 公民編」
- 代々木ライブラリー「2026代ゼミ大学入学共通テスト実践問題集」代々木ゼミナール編